

作家が描くドイツの森林像—グリム兄弟とシュティフター—

石井 寛

北海道大学大学院文学研究科 岡田 江里

はじめに

ドイツの国民は世界の中でも殊のほか森林に対して高い関心を持っていると言われており、ある本ではそのことを表現するのに、『森なしでは生きられない』(2)としていっているほどである。本稿は作家が作品のなかでドイツの森林をどのように捉えて描写しているのかを知るために、ドイツを代表する作家であるグリム兄弟とシュティフターを取り上げて分析する。

ちなみに報告者の1人である石井はドイツの森林史を専門としており、この間に北海道大学大学院文学研究科の大学院生とドイツ語の森林に関する文献を読む勉強会を行ってきた。本稿はその勉強会の成果の一端を取りまとめたものである。なおこの勉強会については部屋の便宜や文献の借入、コピーなど多くの点で北海道大学大学院農学研究院の柿澤宏昭氏からご高配をいただいていることを述べて、氏に感謝の意を表したいと思う。

タキトゥスが描くゲルマニア

ドイツの森林を文獻的に問題とする場合、最初に『ゲルマニア』を取り上げなければならない。その理由は『ゲルマニア』はローマの歴史家であるタキトゥスが紀元98年にゲルマニアの風土、住民の慣習、社会制度、伝統などについて記述したものであるからである。

ローマ人の目でゲルマニアの状況を見ると、土地は「森林に覆われてうす気味の悪い、そうでなければ沼沢に覆われて陰鬱な光景である。(中略)大地は穀物を豊かに産しても、果樹の栽培には適していない。家畜の生産も盛んであるが、おおむね背丈は高くない。役用牛馬にしても、彼らに固有の美しい肢体とか、前額の偉観も見られない。その土地の住民らは、家畜の数を喜ぶ」(4)。「彼らは森や林を神々に捧げられた場所として神聖化し、そして、畏敬の念をもってしか見ないあの神秘的な存在を、神々の名前で呼ぶのである」(10)。

「ゲルマニアの人民は、いかなる町にも住まず、お互いにくっつきあった住居すら辛抱できないことは、十分に世間に知られている。彼らは泉が、あるいは平野や林が気に入ったところで、分れ分れに散らばって住みつく。彼らは村をつくっても、われわれのように、家と家とを結びつけ密集させるといえることはない。(中略)かれらのところでは、切り石すらも、あるいは煉瓦も使用されない。どんなところにも、不細工で外観を無視した魅力のない木材を用いる」(11)。

「野蛮な民族のうちにあつて、1人の妻で満足しているの

はほとんど彼らのみである。ただほんのわずかの人たちだけが例外として、それも放縦からではなく高貴の血統のために、多くの結婚を申し込まれ、口説かれる」(12)。

「飲み物としては、大麦か小麦を発酵させてつくった、どこか葡萄酒に似た液体である。河岸に近く住む人たちは、葡萄酒も買い入れる。食べ物は質素で、野生の果物、取り立ての鳥獣、あるいは凝固させた牛乳である。特別な調理もせず調味料も使わずに、飢えを追い払っている」(13)。

「農地は耕作者の数に比例した広さだけ、耕作者全体によって次々と占有されて行き、ついそれが彼ら相互の間で、地位に応じて区分される。原野が広大であるため分配に困難を伴うことはない。耕作地は年毎に変えられる。しかも土地はあり余っている。(中略)土地に彼らが期待するのは、ただ穀物の収穫だけである」(14)。

このようにゲルマニア人は定住して農耕と牧畜を行い、狩猟を主とする遊牧の民でないことに注意する必要がある。そして森林を神々が宿る場所として神聖化して捉えていた。

グリム兄弟が描く森林像

グリム兄弟は1812年に初めて『子供と家庭のためのメルヒェン集』と題したグリム童話を出版した。1857年に出版されたグリム童話第7版には201話の童話が収録されている。また土地にまつわる伝説や歴史上の人物・出来事を集めた『ドイツ伝説集』の第1巻を1816年に、第2巻を1818年に出版した。グリム童話はグリム兄弟が推敲を重ねて第7版まで出したので、人々を楽しませるものとなったが、ドイツ伝説集は兄弟が生存する間には再版されることはなかった。グリム兄弟とは長兄のヤーコブ(1785年—1863年)と次兄のヴィルヘルム(1786年—1859年)を言い、2人ともプロテスタントである。後に2人ともベルリン大学の教授として迎えられている。森林法制史的には村法を含め各地の古い森林条例を集めて編纂したヤーコブの『ヴァイステューマー』7巻(1840年—1878年)(15)が重要である。

ここでは大野寿子の研究成果によりながら、グリム童話とドイツ伝説集が描く古い時代の森林像についてみる(3)。

まずグリム童話であるが、その第7版に収録された201話の童話のうち101話に森林が登場する。ここで注意すべきことは、グリム童話で描かれているのはメルヒェンの世界であるが、「メルヒェンの森は、たとえば木を切る場、木の実を採集する場である一方で、人間の言葉を話す動物、魔女や小人のような不思議な存在との出会いの場でもあ

り、不思議な出来事に遭遇する場でもある。現実世界とのつながりを保持しつつ、異質な世界の浸透を許す空間として」(16)森林が存在しており、そこに古い時代における人間と森林との関係性の理解が表現されているとみることができる。

森林を表わす語は Wald にほぼ統一されており、Forst は使われていない。また森林を描く場合に時代も場所も特定されていない。そして森林が登場する 101 話のうち、主人公が森林に「入る」という話が 89 話であり、人間を主人公にする話が 87 話である。人間が森林に入る動機としては、仕事、娯楽、危険回避、勧告などに分けられる。

森林で出会う女性のうちで、一番多いのは老女であり、森の老女が登場する話は 17 話に及ぶ。一方、森林に現れる男性は巨人と小人が典型である。巨人の登場はゲルマン・北欧神話の流れを汲むと見なされる。

森林に入ると、さまようことが多い。一日中さまよった挙句に日がくれて、野獣やその他の外敵から身を守る場所を樹木の洞に見出すことがある。また樹木をよじ登って辺りを見渡すことも行われる。童話によっては森林の中の明るい場所を記述する例がある。Baum は 42 話に登場する。しかし森林における樹木が伐採目的で登場する場合には Baum ではなく、Holz が使われている。Holz が登場する話は 14 話である。

グリム童話では森林の暗く深いという側面だけではなく、明るい面も記述されており、古い時代の森林は意外にも人間くさいのである。大野寿子は、森林を含む自然が人間による被支配物であるという世界観以外に、人間と自然が共生できるという両者の間の絆をグリム兄弟が信じていたからではないかと推察している(17)。グリム兄弟が描く森林は定住した農民にとって異界であり、そこに恐れと出会い・夢をみているのではないであろうか。このアンビバレントな両義性の理解が重要である。

次にドイツ伝説集を取り上げる(1)。伝説集には第 1 巻と第 2 巻を合わせて 579 話が収められている。そのなかで森林について記述のあるのは 118 話である。グリム童話とは違い、森林をあらわす単語として、Wald, Forst, Holz, Hain など様々なものが使われている。

伝説集の第 1 巻では土地にまつわる伝説が収められており、場所と時代が明示されている話がほとんどである。登場する森林も地域的に特定されている。例えば、60 話のムンメル湖の話は、シュヴァルツヴァルトの山中、バーデンから遠くないところの湖である。もう一つ重要なことは森林に関わる人間関係が描写されていることである。258 話の遍歴の領主の話では、貴族と森番について取り上げられている。

伝説集の第 2 巻では人物にまつわる伝説が収められている。366 話のセムノーネ族の話では、「スエーピ族の中ではセムノーネ族が最も古く高貴な部族である。彼らは 1 年の決まった時期にある森林で集会を開く。その森は先祖代々神を祀ってきた地あたりには森厳な霊気が漂っている。ここに同じ部族から出た様々な氏の代表が集まって共同で人見御供を一体、神に捧げる。彼らはこの聖森をいたく崇めている」(18)として、古いゲルマニア時代の森林観を改めて紹介している。

527 話ではフライブルクを創設したツェーリンガー家

の起源が語られており、同家の祖先は炭焼であったとのことである。ドイツ伝説集の記述は森林史的にみても非常に興味深いものがある。

シュティフターが描く森林像と森の人々

アーダルベルト・シュティフター (1805 年—1868 年) はボヘミア生まれのオーストリア人で、カトリック信者である。ウィーン大学で法律を学ぶとともに、物理学、天文学など自然科学の講義に出るなど、自然科学にも明るい作家である。シュティフターは多くの作品のなかで森林を取り上げて、多面的に森林を描写した作家として知られており、画家でもあった。ここにシュティフターが描く森林と森の人々について取り上げて紹介する。

我々はドイツロマン主義の影響を受けた 1842 年に書かれた『喬木林』ではなく、1865 年に書かれた『森の泉』を取り上げる。そこではシュティフターは写実主義的に森林の機能を描いている。バイエルンの森に行く老人と少年 1 人少女 1 人との会話である。老人は言う。「森の立っている下の地面全体が岩盤だ。岩盤には裂け目があって、そこに木の根が入り込む。さらに雨水が浸み込んで、水が岩盤の中に溜るんだ。溜まった水が小川となって平地へと下っていく。この水が全ての生き物に飲びと健康を与えるのだ。また森の中に湛えている空気はきれいであり、それが森の樹脂のお陰で一層かぐわしいものとなって、水と同様に飲びと健康をもたらすのだ。だから私はおまえたちを連れて、私がそのありかを知っている森の中の泉と、泉をとりまく大気のなかへ行こうとしているわけだ」(5)。このように森林を水と大気の「泉」として捉えており、その機能が農村に滞在する人々に飲びと健康を与えるとしている。人生経験と都市生活に疲れた老人などにとって森林は飲びと健康を取り戻す元になっていることをこの小説は描いている。

1866 年に書かれた『バイエルンの森』では森林の作用と樹種の特徴について記述している。「森林の発する作用に身を委ねるならば、それは単に健康をもたらすだけではなく、心の状態を静め、そして穏やかにしてくれる。(中略)。モミには気品がある。そしてトウヒはモミに比べて品格は下であっても美しい妹である。それから葉っぱが明るい緑色をしたブナであり、水辺のくぼ地に伸びるハンノキや水を好むその他の樹々である」(6)とする。

1845 年に書かれた『森の小道』では森林に「癒しの機能」があることが記述されている。初め馬鹿者と皆から見なされていた主人公・ティブリスが、知人の医者から精神を直すために結婚することと温泉に行くことを勧められることから小説が始まっている。

一度は温泉地周辺の森林の中で道に迷い、樵に助けられたティブリスであったが、その後、何度も同じ森林に行く中で、「訪れるごとに森は明らかになり、分かり易くなり、ついには森は訪れる人にとっては一つの美となり喜び」(7)となった。そして次第にティブリスは健康を回復したのである。

さらに森林の小道でマリアという若い娘と出会った。そして、「森が怖いなんて思ったことはないわ。森が怖いわけがないんですもの。私は子供のときから森にいて、道だって、方向だってみんな知っているわ。森が怖いなんて私

は分からない。あなただっけ怖くなんかないわ」(19)というマリアと一緒に何度も森林に行き、やがて結婚することとなった。2人は幸せに暮らしたが、特にティブリスは40歳を越えていたにもかかわらず、若さを保っていたという小説が『森の小道』である。シュティフターが描く近代の森林像には中世の人々が持っていた恐れというイメージがなくなっていることをこの小説は見事に示している。

それとともにシュティフターが優れているのは、森林を「森の泉」、「癒しの場」として多面的に捉えていることであり、そのこと自体、現代に通じる捉え方となっている。我々はそれに加えて、シュティフターが森林に住む様々な人を描写していることにも注目したい。

1846年に書かれた『樅の木ほのほり』では、シュティフターの生まれ故郷であるオーバーブランにおける樅の生活と狩猟の仕方が詳細に記述されている。簡単に紹介すると、樅は1年中、伐採に従事している。しかし日曜日には自分の家に帰り寛いでいる。伐採地の隅に樅の小屋があり、そこで寝泊りするとともに、昼食と夕食をとる。

一方、狩猟は大掛かりなものであり、領主、司教、騎士、その家族などが来る。そして狩猟の始めには、領主の森林官、狩猟官、森番などが整列し、領主が挨拶する。領主が狩猟することはオーバーブランにとって大きなお祭りを意味したのである。

1847年に書かれた『森ゆく人』では、森のある地方に多くいる森番(原語は Heger)を取り上げている。「最も普及しているのは森番である。彼らは森林事業の最底辺にあたる末端部分の世話をすることになっている。彼らは森で仕事をしたり狩猟をしたりする猟師の下に、そしてもっとも地位が高くて、わずかな場所にしか配属されていない森林監督官より遥か下に位置している。森林での犯罪、新たに育った若木の監視、裂けた幹や風で倒れた木や崩壊した箇所に関する調査、伐採可能な区域の選定、森林で生計を立てている人々に対する推定配分と指示等に係るあらゆること、森番の仕事」(8)であるとしている。

1853年に出版された作品集『石さまさま』に収録された『みかげ石』では木材を乾留してタールを造り、さらにタールを蒸留してピッチを造る者を描いている。そして『みかげ石』で興味深いのは、ペストがモルダウ川流域ではやった時に、森深くピッチ焼きの男が家族とともに逃げ込み、数年間住んだことを記述していることである。

さらにシュティフターの代表作であり、1865年に書かれた『ヴィティコー』では、騎士であるヴィティコーを頭にして、森の民であるオーバーブランの住民達が武装して戦う姿が描かれている。オーバーブランの住民の職業は、亜麻布織り職人、羊毛織り職人、大工、石工、左官屋、鍛冶屋、車大工、居酒屋、炭焼きなど実に様々であるが(9)、そのような森の住民が武器を持って各地を転戦して戦っている。『ヴィティコー』の設定時期は12世紀後半であるが、村の住民は様々な仕事に従事するとともに、必要な場合には森の人々が武装することをこの小説は教えており、1804年にシラーが発表した戯曲『ヴィルヘルム・テル』とも共通して非常に興味深いものがある。

おわりに

はじめに書いたように、本稿は小さな勉強会のとりあえずの成果を発表したものである。今後、一層文献を読み込んで知見を蓄積して行きたいと思う。

今回の発表で、グリム兄弟とシュティフターの描く森林像をみることによって、中世の森林像と近代の森林像が異なることが明らかにされた。今後はタキトゥスが描く森林像を含めて相互の関係について考えていきたいと思う。

引用文献

- (1) ドイツ伝説集の訳として、桜沢正勝、鍛冶哲郎訳『ドイツ伝説集(上)、(下)』、人文書院、1987年、1990年がある。なおグリム童話の訳には様々なものが出版されている。
- (2) J・ヘルマン編著、山縣光晶訳『森なしでは生きられない』、築地書館、1999年
- (3) 大野寿子『黒い森のグリム』、郁文堂、2008年。大野のこの研究によれば、151番の童話には2話が収録されているので、200話ではなく、201話がグリム童話に収められているという。ここでは大野の見解に従って記述する。
- (4) タキトゥス、国原吉之助訳『ゲルマニア』、筑摩書房、1996年、25-26頁
- (5) シュティフター『森の泉』、シュティフター作品集第3巻、松籟社、1984年、245-246頁の叙述を要約した。
- (6) シュティフター『バイエルンの森から』、シュティフター作品集第4巻、松籟社、1984年、145頁
- (7) シュティフター『森の小道』、岩波文庫、2003年、66頁
- (8) シュティフター『森ゆく人』、松籟社、2008年、36頁
- (9) シュティフター、谷口泰訳『ヴィティコー』、白馬書房、1990年、341頁
- (10) 前掲『ゲルマニア』、35頁
- (11) 前掲『ゲルマニア』、45-46頁
- (12) 前掲『ゲルマニア』、48頁
- (13) 前掲『ゲルマニア』、58-59頁
- (14) 前掲『ゲルマニア』、63-64頁
- (15) ワイズテューマーは「ドイツ法律古事誌」とも訳されている。
- (16) 前掲『黒い森のグリム』、4頁
- (17) 前掲『黒い森のグリム』、60頁
- (18) 前掲『ドイツ伝説集(下)』、5頁
- (19) 前掲『森の小道』、95-96頁